

バウムテストにおける再検査信頼性の見なおし

佐渡忠洋*, 松本香奈**, 田口多恵***

*岐阜大学保健管理センター **岐阜女子大学文化創造学部

***浜松大学臨床心理教育実践センター

(2012年9月1日受理)

Re-viewing the Retest Reliability of the Baumtest

* Health Administration Center, Gifu University

** Faculty of Cultural Development, Gifu Women's University,

*** Clinical Psychology Education Center, Hamamatsu University

SADO Tadahiro*, MATSUMOTO Kana** and TAGUCHI Tae***

(Received September 1, 2012)

I はじめに

今日まで、わが国においてバウムテストの研究は膨大に行われてきた(佐渡, 2011)。それらの中には、バウムテストを科学的なテストとして位置づけるために、再検査信頼性の検証を行った報告がいくつかある。筆者らが吟味した限り、それらの研究は1980年までに行われているが(名倉ら, 1968; 青木, 1976, 1980; 仙田, 1980a, 1980b)、それはこの時期に「科学的な技法である」と広く証明する必要があったからであろう。ともあれ、これらの報告によって、個人のバウム表現は安定しており、科学的にも信頼に足る技法であることが認められ、さまざまな心理学的研究を可能とする基盤を築くことができた、といえる。

しかしながら、再検査信頼性の知見に対しては、臨床実践でしばしば疑問を感じることはある。そもそも、再検査信頼性の高きとは、同一の描き手の表現が安定していることを示すものであって、常にまったく同じ表現をす

ること(自然科学での再現性)を意味するわけではない。それでも、数回のバウムテストの機会があった心理療法事例はもちろん、短期間に2つの相談機関で計2回実施された事例などにおいて、描かれるバウムの違いに驚きを感じる時があるからである。さらに、同じ描き手の数枚のバウムに、大きな変化が認められる時も、まったく変化が認められない時もあるため、安易にバウムから治療効果を理解することや、治療の展開からバウムの変化を期待することには危険な場合もある。こういった体験から、再検査信頼性の知見を完全に否定する者がいるかもしれない。しかし、それも直解主義的な発想で、過度の単純化ではないだろうか。

したがって、再検査信頼性という問題から考えた場合、バウムを理解する姿勢には少なくとも次の2つがある、と筆者らは考えた。

○バウム表現とは、その時、その過程、その関係性という文脈の中で、描き手がそう表現する必然性と意味があるかのような、ま

さに一回性のものであり、それ故に、決して一般化されるものではないが、それでもやはり、バウム表現には何らかの法則性や構造が存在するように思える。

- バウム表現は安定していて、バウムの形態や位置、描き方と、描き手のある特徴との間には一定以上の関連があるために、個人のバウムは他者のバウムや研究知見などと比較可能な対応関係が概ね認められるのだが、実際には、その枠を超えて千変万化することを経験する。

前者の例として、クライアントの個性を最大限尊重する心理臨床家であれば、臨床実践において、まずは一回性なり個別的なものに配慮をもつが、それでも法則性なり集団的な傾向を無視した理解は行わないであろう、ということである。後者の例としては、信頼できる科学研究で指摘されたある指標が目の前のバウムに認められたからといって、その解釈仮説がそのバウムに適用し得るかを顧慮せずに解釈は行わないであろう、とするものである。これら自明の姿勢は、事象に対して「個と集団」と「臨床と研究」のように二元論的に考える時、何が論理的に先行するかというよりも、何を心理臨床家が大切にしているかによって、2つの言い方ができることを示しているにすぎない。ただし、一昔前の「診断か治療か」という論争を想起させるこの問題は、心理臨床家が論理的矛盾を抱え耐える者であることを示す、重要な事柄であろう。

上述の2つの姿勢は、研究を行う姿勢にも影響を与えているはずである。例えば、従来の再検査信頼性の研究は、後者の姿勢からなされた研究といえる。つまり、それらでは、数回バウムテストを行ったとしても、個人と集団のバウム表現が変化しないことを暗々裏に期待して（他方、治療効果の測定手段や説

明手段として描画を用いた研究では、どこかで表現が変化することを期待して）、結果を理解している可能性が高い。そこで、前者の姿勢も踏まえて事象を検討するならば、再検査信頼性の研究と同じ手続きで行われた結果であったとしても、バウム表現の法則性に関する新たな知見や、個別のバウム理解の一助となる知見が得られるのではないかと筆者らは考えた。すなわち、まず個別的なものから理解を試み、バウム表現は安定しているという考えを一旦括弧に入れて、「変化する/しない」ということを同等のものとして扱い、個人の系列的なバウム表現を相対的にも理解していくことで、バウム表現に関する理解を深めることができるのではないかと考えたわけである。

以上の議論から、本研究は、再検査信頼性の考えを見なおし、個人のバウム表現の変化についての理解を深めることを目的として、同じ条件で同一の描き手にバウムテストを2回実施し、得られたバウムを比較することとした。また、筆者らはこれまでに、同一の描き手に対して異なる条件で2回のバウムテストを実施した研究を行ってきたため（佐渡ら、2009など）、本研究によって、それらのための基礎資料も得られると考えている。

II 方法

1 描き手と手続き

同一の描き手に2回実施する場合には、1回目と2回目の間隔が議論されるべきであろう。あまりに間隔をあけるとさまざまな要因の介入が危惧され、最低限の統制もとれなくなってしまう。そこで本研究では、同日に続けて2回実施する群（以下、同日群）と、1週間の間隔を開けて2回実施する群（以下、1週群）の2群を設け、調査することとした。

(1) 同日群の調査

描き手は、東海地方の私立大学の陸上部員71名（平均年齢 19.4 ± 0.95 歳）で、内訳は男性62名、女性9名である。手続きは、まず2011年10月上旬、部活動のミーティング中に30分の調査時間を確保した。描き手に対して、同日に続けてバウムテストが2回行われることは伝えず、結果に影響のない程度に研究内容を説明して、調査協力への同意を得た。1回目の実施は、4B鉛筆とA4判画用紙を配布し、「画用紙はご自身の前に縦長の向きで置いて下さい」「時間は7分間とります」と伝えてから、「実のなる木を描いてください」の指示により集団法で行った。描画の終了に関しては、終了予定時間の1分前に、そのことを描き手らに伝えたが、厳密に7分で区切るのではなく、全体の様子を伺いつつ、描画が自由な雰囲気で行えるようにも努めた。描画後、画用紙の裏にバウムの樹種、樹高、樹齢に関する具体的な説明を記すよう求めた。その後、特に説明を加えることなく、改めて用紙を配布して、1回目と同じ手続きで2回目を実施し、同様に画用紙の裏にバウムの説明を求めた。最後に、アンケート用紙を配布し、「1枚目と2枚目で描く“実のなる木”を変えましたか？（「はい」「いいえ」の選択回答）」と、「“はい”と答えた人は、どのように変えようと思いましたか？（自由記述）」の質問への回答も求めた。

(2) 1週群の調査

描き手は、東海地方の私立女子大学において、幼稚園教員免許取得に必須の講義を受講する女性44名（平均年齢 18.5 ± 0.76 歳）である。手続きは、まず2011年7月上旬、講義中に20分の調査時間を確保した。そして、1週間の間隔を空けてバウムテストが2回行われることは伝えず、調査協力への同意を得た。

具体的な手続きは、ほぼ同日群と同じであるが、2回目は1回目の1週間後の同じ時間に行ったこと、描画後のバウムの説明は1回目も2回目ともにアンケート用紙への記入で求めたこと、との相違はある。

以上のように、1回目と2回目の調査は可能な限り条件を均一にし、同日群と1週群についても実施間隔を除いて同一の手続きになるように努めた。しかし、描き手の属性の違いは群間で統制できなかったため、その比較は慎重に行う必要がある。

ここより、1回目と2回目で描かれたバウムをそれぞれ1stバウム、2ndバウムと記す。

2 分析方法の検討

分析に際して、データと評定の均一性を確保するために、2本以上のバウムを描いたデータは検討の対象から除くこととした。その結果、同日群は69名（平均年齢 19.3 ± 0.09 歳、男性60名、女性9名）の計138枚のバウムが、1週群は42名（平均年齢 18.5 ± 0.77 歳、すべて女性）の計84枚のバウムが検討の対象となった。

分析方法は、本研究の目的から、描き手のバウムの説明と質問への回答結果、対評定、スクリーニング法で行うこととした。

3 対評定

ここでいう対評定とは、評定者に同一の描き手の2枚のバウムを左右に並べた状態で提示し、「描線」「幹」「幹先端」「枝」「樹冠」「根」「大きさ&位置」のカテゴリーごとに評価を求めるものである。評価は2枚のバウムを眺めながら「大変似ている」「似ている」「どちらとも言えない」「似ていない」「全く似ていない」の5段階で行う。そして「似ていない」「全く似ていない」と評定された場合、当該

表1 スクリーニング法における指標

カテゴリー名	指標名と説明
用紙用途	<u>幹下縁立</u>: 幹の根元が用紙下部の縁に立つもの。Kochの85-86頁と中島の46頁を参照。ただし、Kochと中島は、これを幹の根元を捉える指標としているが、本稿では用紙の使い方の指標と理解し、このカテゴリに取り入れた。 <u>上縁はみ出し</u>: 描かれたバウムが用紙の上縁からはみ出している場合(幹に限定されない)。Kochの237-238頁、中島の58頁を参照。 <u>その他はみ出し</u>: 「上縁はみ出し」以外で、バウムが用紙の左右の縁からはみ出しているもの、見切れているもの。Kochと中島では指標とされていないが、本データで比較的多く認められたので、指標として採用した。「上縁はみ出し」が用紙から“突き出る”ことを意味しているとすれば、本指標は用紙への“おさまらなさ”を意味していると考えたからである。
描線	<u>多重線</u>: バウムのどこかに、重ねて描かれた線があるもの。Kochは描線の特徴に言及しているが(165-166頁)、指標とはしておらず、『整理票』にもない。ただし、描線はバウムの読み取りに大きな影響を与えるので、本稿では指標として採用した。 <u>断線</u>: バウムのどこかに、途切れた線で描かれたもの。「多重線」と同じ理由から、指標として採用した。
幹の構造	<u>一線幹</u>: 輪郭がなく一本線で描かれている幹。Kochの73-74頁、中島の36頁を参照。 <u>幹上直</u>: 幹先端(上部)がはんだ付けされたように直線的に閉じられたもの。Kochの85頁、190-194頁と、中島の44-46頁を参照。 <u>根元の広がり</u>: 幹の根元が広がっているもの。Kochは広がった根元ではなく、早期型の一つである「まっすぐな根元」(86-88頁)を取りあげている。本稿は描き手の発達の側面を捉えようとするものではないので、「根元の広がり」を指標として採用した。『整理票』の「広い基部」に相当。 <u>曲がった幹</u>: 幹に曲がりがあるもの。Kochおよび『整理票』では指標とされていないが、幹の中間部の形態を理解するために、指標として採用した。
幹の表面	<u>幹表面の描写</u>: 幹表面に描写があるもの。Kochは樹皮や傷などさまざまな表現に言及しているが(162-164頁)、本稿では描写の有無のみに注目し、指標として採用した。
枝の本数	<u>枝四本以下</u>: 枝が四本以下のもの。Kochは枝の本数の指標は定めていない。『整理票』では枝の本数を「枝なし」「一本」「二～三本」「四本以上」「多数」で理解するが、これでは細かすぎる。本稿では形態を理解するための便宜上の指標として、これを採用した。 <u>枝五本以上</u>: 枝が五本以上のもの。採用理由は「枝四本以下」を参照。 <u>枝なし</u>: 枝が描かれていないもの。採用理由は「枝四本以下」を参照。『整理票』の「枝なし」に相当。
枝の構造	<u>全一線枝</u>: 全ての枝が一本線で描かれたもの。Kochの74-76頁、中島の46-47頁を参照。 <u>全二線枝</u>: 全ての枝が二本線で描かれたもの。Kochの76-78頁、中島の46-47頁を参照。 <u>一部一線枝</u>: 二線枝の中に一線枝が混じって描かれているもの。Kochの74-78頁、中島の46-47頁を参照。 <u>分枝あり</u>: 枝が分かれているもの。Kochはさまざまな分枝に言及しているが(196頁の「直行分枝」や217頁の「逆向きの分枝」など)、分枝の有無だけの指標は定めてはいない(中島の51-52頁を参照)。本稿では、有無のみに注目し、指標として採用した。
樹冠	<u>丸い樹冠</u>: 丸い形をした樹冠(幹のところで途切れていてもよい)。Kochは170-172頁で「球形樹冠」を指標としているが、これにはあまりに多くの樹冠が含まれてしまう(中島の52-57頁を参照)。そこで、樹冠の形態を理解するために、これを指標として採用した。『整理票』の「ボール型冠」に相当。 <u>波線の樹冠</u>: 波線で描かれた樹冠(途切れていてもよい)。採用理由は「丸い樹冠」を参照。『整理票』の雲型冠「アーケード冠」「螺旋状冠」がここに含まれる。 <u>その他の樹冠</u>: 上記「丸い樹冠」でも「波線の樹冠」でもないもの。採用理由は「丸い樹冠」を参照。本稿では稀な形の樹冠、という意味に過ぎない。 <u>樹冠なし</u>: 樹冠のないもの。 <u>葉あり</u>: 樹冠に葉があるもの。Kochの253-256頁、中島の54頁を参照。
根	<u>根あり</u>: 根が描かれたもの。Kochは152-153頁で一線根と二線根について言及している(中島の55頁も参照)。本稿では有無のみに注目し、指標として採用した。
実	<u>実多種</u>: 二種類以上の実があるもの。Koch自身は、樹冠に異種の実や葉や花などが描かれている場合に用いる「樹幹における主題の変化」の指標を定めている(中島の54-55頁を参照)。葉と花が異種であるかを判断するのは難しいと考え、実が一種類か二種類以上かで区別し、指標として採用した。 <u>実一種</u>: 一種類の実があるもの。採用理由は「実多種」を参照。
バウム以外	<u>地面描写</u>: 地面や地平線があるもの。Koch(244-245頁)は、木の他に書かれたものが地面線あるいは地面だけの場合は「ほのめかされるだけの風景」の指標に合致すると考える(中島は59頁で「地面、地面線」の和訳を与えている)。しかしこれでは、例えば地面線と太陽が描かれた場合、地面の表現をカウントできなくなる。そこで本稿では、「地面描写」という指標で、単独のものとした。 <u>付属物あり</u>: バウムと「地面描写」以外に何らかの付加的な描写があるもの。「地面描写」を参照。

カテゴリーのどこがどのように似ていないかに関する具体的な記述を行う。なお、上のカテゴリー以外には「その他」も設けており、これは完全な自由記述となっている。

本研究では、3名の心理臨床家がこの評定を個別に行った。得られた「大変似ている」から「全く似ていない」までの評定結果は、それぞれ順に1から5点の数値に置き換えた。そして、各描き手の最終値は評定者3名の平均値とした後、各群の平均値と標準偏差を算出した。

4 スクリーニング法

筆者らは以前、仮説を持たないまま多数の指標を網羅的に検討していくスクリーニング法には、重大な問題があることを指摘してきた(坂本ら, 2012)。しかし、本研究の目的から、あえて採用することとした。ただし、「選択した指標がバウムを理解する切り口であり、研究者の着眼点を示すもの」(坂本ら, 2012)であるから、これで示される結果には限界があり、1stバウムと2ndバウムとを完全に比較できないことは留意されたい。

筆者らは、指標の選択において「バウム全姿を大雑把に捉えるほどよい数の指標」との考えを持ち、他のバウムテスト研究者と議論しながら抽出した。そして、Koch(1957/2010)の指標、中島(2011)によるコッホの指標の註釈を下敷きに、わが国の研究でしばしば用いられてきた『バウム・テスト整理票(以下、整理票)』(国吉ら, 1980)も参考にして、表1に示す10カテゴリー計27個の指標を採用した。

表1に従って、3名の心理臨床家が上の指標に合致するか否か、すべてのバウムを個別に評定した。それらの評定結果を照らし合わせ、2名以上の評価が一致したものを最終評価とした。統計学的分析にあたっては、まず

各指標の出現度数と百分率を導き出した。その後、1stバウムと2ndバウムの全指標の出現度数をMcNemar Testによって検定した。

さらに、同一の描き手の1stバウムと2ndバウムの間で合致する指標が変化した人数と百分率も、指標とカテゴリーごとに導き出し、それぞれ「指標内」と「カテゴリー内」で示した。また、「指標内」で個人の合致がどのように変化したかも捉えるために、1stバウムで指標に合致し2ndバウムで合致しなかった者を「1st型」、その反対を「2nd型」として、それぞれ人数と百分率を明らかにした。

III 結果と考察

1 描き手のバウムの回答から

描き手が描画後に行ったバウムの説明、および質問への回答結果を表2にまとめた。

1stバウムと2ndバウムとで「描く“実のなる木”を変えましたか?」との質問に「はい」と答えた者は、同日群で78.3%, 1週群で61.9%であった。これは、6~8割の描き手が、2ndバウムの表現時に1stバウムとは異なる表現をしようとしていた、と理解できる結果である。実際のバウム形態にどれほどの変化が認められるかという程度の問題はあるものの、このように、2枚のバウムを描く時、描き手の半数以上が2回目に、表現を変化させたと意識していることは印象的である(実際に描き手がバウムを描く時にそのように考えていたか、もしくは後になってからそのように意味づけたか、という点も議論されるべきかもしれないが)。というのも、そこには、描き手の意図なり想いが反映していると思われるからである。なお、「どのように変えようとしたか」についての描き手の回答からは、傾向を読み取ることはできなかった。

続いて、バウムの回答では、2枚のバウム

表2 描き手によるバウムの回答

		同日群：n = 69	1週群：n = 42
		人数 (%)	人数 (%)
「1枚目と2枚目で描く“実のなる木”を変えましたか？」の質問に「はい」と答えた者		54 (78.3)	26 (61.9)
樹種	二枚で同じ樹種	20 (29.0)	19 (45.2)
	二枚で異なる樹種	49 (71.0)	23 (54.8)
樹高	二枚で同じ樹高	11 (15.9)	13 (31.0)
	1stバウムより2ndバウムの方が高い	35 (50.7)	17 (40.5)
	1stバウムより2ndバウムの方が低い	23 (33.3)	12 (28.6)
樹齢	二枚で同じ樹齢	9 (13.0)	14 (33.3)
	1stバウムより2ndバウムの方が古い	34 (49.3)	11 (26.2)
	1stバウムより2ndバウムの方が若い	26 (37.7)	17 (40.5)

表3 対評定における各カテゴリーの平均値 (標準偏差)

	描線	幹	幹先端	枝	樹冠	根	大きさ&位置
同日群	2.7 (0.98)	3.1 (1.12)	2.9 (1.22)	3.0 (1.17)	3.6 (1.13)	2.9 (1.09)	3.0 (1.05)
1週群	2.5 (0.78)	2.8 (1.11)	2.6 (1.06)	2.5 (0.94)	3.0 (0.89)	2.6 (1.09)	2.7 (1.16)

間で樹種が変化する者は5～7割, 樹高が変化する者は7～8割, 樹齢が変化する者は7～9割であった。この結果は, 上の結果と関連させて考えるべきであろう。2ndバウムを描く際, 多くの描き手が1stバウムとは異なる表現を行う意図を持ったとするならば, これらにも変化が生じることは当然といえる。

同日群と1週群とでは描き手の属性が異なるため, 一概に比較できないのだが, 同日群が1週群に比べ, ここで検討したすべての項目で変化が強く認められたことは興味深い。同日群は1stバウムが目の前にある中で2ndバウムを描く状況であるとすれば, 1stバウムのイメージがより鮮明で, それに影響を受け続ける中で2ndバウムを描く場面と考えることができるかもしれない。

2 対評定から

対評定の結果をまとめたのが表3と図1である。この検討より, 2枚のバウム間で, どの部分に表現の差異があるのかを考えることができる。

図1が示すように, 同日群と1週群とでは, 波形の絶対的な高低には差がある。それは描き手の属性の違いによる影響かもしれない。ただし, 両群の波形を相対的に比較した場合, ある傾向を読み取ることができる。つまり, 「描線」に差異は認められにくい, 「幹」「大きさ&位置」「樹冠」に差異が認められやすい, という仮説を得ることができる。そこで, これらのカテゴリーに対して, 評定者が記述した変化の内容を検討した。しかし, 「幹」の差異は両群とも幹表面の描写に差異を認めたものがほとんどで, 幹の形態についての言及はほとんどなかった。したがって, 「幹」に大きな変化が生じているとは考えられにくい。また, 「樹冠」や「大きさ&位置」に関しては, 評定者は変化を記述してはいるものの, どのような変化が生じているかなど, 具体的で法則的な意味は読み取れなかった。

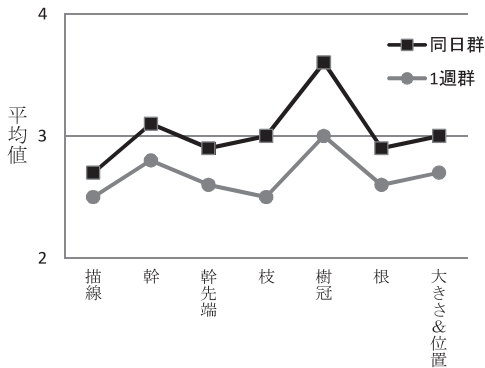


図1 同日群と1週群との対評定の比較

以上から、同一の描き手の2枚のバウム表現には、「樹冠」と「大きさ&位置」に何らかの変化が生じた可能性があるのだが、具体的な変化を捉えることはできなかった（バウム表現の中でも「幹」「樹冠」「大きさ&位置」に評定者が変化を感じやすい、という点も考慮しなければならないであろう）。次のスクリーニング法による検討が、この仮説をさらに洗練させてくれるはずである。

3 スクリーニング法から

スクリーニング法の分析結果を、同日群と1週群とに分けてまとめたのが表4および表5である。

(1) 1stバウムと2ndバウムの出現度数の比較から

同日群の結果で「波線の樹冠」「根あり」「樹冠なし」に有意差が認められたことから、1stバウムと2ndバウムとでは樹冠と根に変化が認められやすいのではないか、という仮説が得られる。一方、1週群の結果で「多重線」のみに有意差が認められたことから、1stバウムと2ndバウムとでは描線の特徴に違いが認められやすい、と推測できる。このように、同日群と1週群とでは統計学的分析から得られる知見がいくぶん異なる。しかし、検討し

た27個の指標の内、有意差が認められた指標がわずかであることは、両群に共通しているように。したがって、本研究は、再検査信頼性に関する先行研究の妥当性を概ね裏付ける形になった、といえる。

しかしながら、描き手らの回答から示されたように、6~8割の描き手が1stバウムと2ndバウムとで「描く“実のなる木”を変えた」としていることは無視できるものではない。そこで、次に両バウムで指標と合致したか否かの変化人数から、考察を続けることとした。

(2) 変化人数の記述統計から

個別の指標の変化人数を見ると、同日群の方が1週群に比べて、ほとんどの指標で変化人数が多い。そのため、同日群の方が一週群よりも変化が大きい、と考えることもできるが、これは「変化させた」と回答した者が同日群に多かったことや、描き手の属性の違いが影響しているかもしれないので、これ以上の考察は難しい。論を進めるためには、統計学的分析の有意差には表れなかったものの、個別のバウムを理解するという点では見過ごせない意味を、両群の共通点から探す必要がある。

個別の指標において、両群とも描き手の20%以上が変化していたのは、「多重線」「枝四本以下」「枝五本以上」「実一種」「付属物あり」であった。これは、バウムの中でも枝や描線、実、そして付属物に変化が認められやすいことを示唆している。しかし、前項の対評定で推測された、「大きさ&位置」と「樹冠」に差異が生じるかもしれない、という知見とはズレがある。

次にカテゴリーにおける変化人数を考えたい。このカテゴリー内の変化とは、カテゴリー内のいずれかの指標との合致が変化したかを

表4 スクリーニング法による同日群 (n=69) の1stバウムと2ndバウムとの比較

カテゴリー名	指標名	1st		McNemar	変化人数 (%)			カテゴリー内
		人数 (%)	人数 (%)		指標内	1st型	2nd型	
用紙用途	幹 下 縁 立	19 (27.5)	26 (37.7)		15 (21.7)	11 (15.9)	4 (5.8)	
	上 縁 は み 出 し	11 (15.9)	18 (26.1)		17 (24.6)	12 (17.4)	5 (7.2)	28 (40.6)
	その他はみ出し	8 (11.6)	15 (21.7)		15 (21.7)	11 (15.9)	4 (5.8)	
描線	多 重 線	34 (49.3)	27 (39.1)		17 (24.6)	5 (7.2)	12 (17.4)	
	断 線	11 (15.9)	11 (15.9)		8 (11.6)	4 (5.8)	4 (5.8)	22 (31.9)
幹の構造	一 線 幹	0 (-)	0 (-)		0 (-)	0 (-)	0 (-)	
	幹 上 直	2 (2.9)	0 (-)		2 (2.9)	0 (-)	2 (2.9)	
	根 元 の 広 が り	48 (69.6)	49 (71.0)		15 (21.7)	8 (11.6)	7 (10.1)	22 (31.9)
	曲 が っ た 幹	0 (-)	5 (7.2)		5 (7.2)	5 (7.2)	0 (-)	
幹の表面	幹 表 面 の 描 写	51 (73.9)	45 (65.2)		12 (17.4)	3 (4.3)	9 (13.0)	12 (17.4)
枝の本数	枝 四 本 以 下	12 (17.4)	13 (18.8)		17 (24.6)	9 (13.0)	8 (11.6)	
	枝 五 本 以 上	18 (26.1)	20 (29.0)		16 (23.2)	9 (13.0)	7 (10.1)	26 (37.7)
	枝 な し	38 (55.1)	34 (49.3)		16 (23.2)	6 (8.7)	10 (14.5)	
枝の構造	全 一 線 枝	1 (1.4)	4 (5.8)		3 (4.3)	3 (4.3)	0 (-)	
	全 二 線 枝	25 (36.2)	25 (36.2)		18 (26.1)	9 (13.0)	9 (13.0)	27 (39.1)
	一 部 一 線 枝	4 (5.8)	3 (4.3)		5 (7.2)	2 (2.9)	3 (4.3)	
	分 枝 あ り	17 (24.6)	15 (21.7)		16 (23.2)	7 (10.1)	9 (13.0)	
樹冠	丸 い 樹 冠	6 (8.7)	7 (10.1)		7 (10.1)	4 (5.8)	3 (4.3)	
	波 線 の 樹 冠	44 (63.8)	33 (47.8)	p=0.013	17 (24.6)	3 (4.3)	14 (20.3)	
	そ の 他 の 樹 冠	14 (20.3)	16 (23.2)		16 (23.2)	9 (13.0)	7 (10.1)	29 (42.0)
	樹 冠 な し	4 (5.8)	11 (15.9)	p=0.039	9 (13.0)	8 (11.6)	1 (1.4)	
	葉 あ り	6 (8.7)	6 (8.7)		8 (11.6)	4 (5.8)	4 (5.8)	
根	根 あ り	28 (40.6)	19 (27.5)	p=0.022	13 (18.8)	2 (2.9)	11 (15.9)	13 (18.8)
実	実 多 種	6 (8.7)	8 (11.6)		8 (11.6)	5 (7.2)	3 (4.3)	15 (21.7)
	実 一 種	57 (82.6)	50 (72.5)		15 (21.7)	4 (5.8)	11 (15.9)	
バウム以外	地 面 描 写	27 (39.1)	24 (34.8)		13 (18.8)	5 (7.2)	8 (11.6)	22 (31.9)
	付 属 物 あ り	15 (21.7)	15 (21.7)		14 (20.3)	7 (10.1)	7 (10.1)	

捉えているため、カテゴリー名はそのままバウムの形態部や領域を意味している。両群ともに描き手の30%以上が変化していたカテゴリーは、「用紙用途」「枝の本数」「枝の構造」「樹冠」「バウム以外」であった。この結果は、概ね前項の対評定の知見と一致するものであった。

以上より、同一の描き手に対して同じ条件下でバウムテストを2回施行した場合、1stバウムと2ndバウムとの間には、「筆者らが用

いた指標で理解したところ」という条件付きで、次のような変化が生じていると考えることができる。

○個人のバウム表現は、個別の指標では0～30%という割合で、指標をまとめたカテゴリーでは10～40%という割合で、変化する可能性がある。

○その変化は、バウム表現の内、用紙の使い方（おさまり方）、枝の本数や構造、樹冠

表5 スクリーニング法による1週群 (n=42) の1stバウムと2ndバウムとの比較

カテゴリー名	指標名	1st		McNemar	変化人数 (%)			
		人数 (%)	人数 (%)		指標内	1st型	2nd型	カテゴリー内
用紙用途	幹 下 縁 立	8 (19.0)	11 (26.2)	$p=0.004$	5 (11.9)	4 (9.5)	1 (2.4)	13 (31.0)
	上 縁 は み 出 し	6 (14.3)	5 (11.9)		5 (11.9)	2 (4.8)	3 (7.1)	
	その他はみ出し	4 (9.5)	7 (16.7)		5 (11.9)	4 (9.5)	1 (2.4)	
描線	多 重 線	19 (45.2)	10 (23.8)	$p=0.004$	9 (21.4)	0 (-)	9 (21.4)	11 (26.2)
	断 線	1 (2.4)	1 (2.4)		2 (4.8)	1 (2.4)	1 (2.4)	
幹の構造	一 線 幹	0 (-)	0 (-)	$p=0.004$	0 (-)	0 (-)	0 (-)	9 (21.4)
	幹 上 直	0 (-)	0 (-)		0 (-)	0 (-)	0 (-)	
	根 元 の 広 が り	34 (81.0)	38 (90.5)		6 (14.3)	5 (11.9)	1 (2.4)	
	曲 が っ た 幹	4 (9.5)	1 (2.4)		3 (7.1)	0 (-)	3 (7.1)	
幹の表面	幹 表 面 の 描 写	23 (54.8)	24 (57.1)		9 (21.4)	5 (11.9)	4 (9.5)	9 (21.4)
枝の本数	枝 四 本 以 下	14 (33.3)	17 (40.5)		13 (31.0)	8 (19.0)	5 (11.9)	16 (38.1)
	枝 五 本 以 上	11 (26.2)	9 (21.4)		12 (28.6)	5 (11.9)	7 (16.7)	
	枝 な し	17 (40.5)	16 (38.1)		7 (16.7)	3 (7.1)	4 (9.5)	
枝の構造	全 一 線 枝	2 (4.8)	3 (7.1)	$p=0.004$	3 (7.1)	2 (4.8)	1 (2.4)	13 (31.0)
	全 二 線 枝	22 (52.4)	21 (50.0)		7 (16.7)	3 (7.1)	4 (9.5)	
	一 部 一 線 枝	1 (2.4)	2 (4.8)		1 (2.4)	0 (-)	1 (2.4)	
	分 枝 あ り	10 (23.8)	8 (19.0)		6 (14.3)	2 (4.8)	4 (9.5)	
樹冠	丸 い 樹 冠	0 (-)	1 (2.4)	$p=0.004$	1 (2.4)	0 (-)	1 (2.4)	13 (31.0)
	波 線 の 樹 冠	36 (85.7)	33 (78.6)		5 (11.9)	1 (2.4)	4 (9.5)	
	そ の 他 の 樹 冠	4 (9.5)	4 (9.5)		4 (9.5)	2 (4.8)	2 (4.8)	
	樹 冠 な し	1 (2.4)	4 (9.5)		3 (7.1)	0 (-)	3 (7.1)	
	葉 あ り	13 (31.0)	11 (26.2)		8 (19.0)	3 (7.1)	5 (11.9)	
根	根 あ り	19 (45.2)	15 (35.7)		4 (9.5)	0 (-)	4 (9.5)	4 (9.5)
実	実 多 種	9 (21.4)	9 (21.4)	$p=0.004$	6 (14.3)	3 (7.1)	3 (7.1)	9 (21.4)
	実 一 種	30 (71.4)	29 (69.0)		9 (21.4)	4 (9.5)	5 (11.9)	
バウム以外	地 面 描 写	13 (31.0)	13 (31.0)	$p=0.004$	6 (14.3)	3 (7.1)	3 (7.1)	14 (33.3)
	付 属 物 あ り	7 (16.7)	13 (31.0)		12 (28.6)	9 (21.4)	3 (7.1)	

の形態や有無、バウム以外の描写、に認められる可能性が高い。

このことは、「バウムテストは再検査信頼性の高い技法である」との考えに、一種の疑問を投げかけるものではないだろうか。少なくとも、同一の描き手には上述のような変化が生じており、バウム表現にはゆらぎがあることを示したこの結果は、決して無視できるものではないだろう。なぜならば、微細なバウム表現の変化が時に重要な意味をもちうる

ことを知るわれわれ心理臨床家には、「個人のバウム表現は安定している」というあまりに単純化した理解に留まることが、許されないとと思われるからである。

4 表現の変化とバウムの論理

ところで、宿谷ら (1969) の指摘のとおり、描画結果と描き手と状態像との間には、逆説的な関係が認められることがある。この逆説的な関係があるために、同一の描き手の数枚の描画をどのように理解していくかは、実際

難しい試みとなる。

また、イメージの特性の一つに多義性（集約性）があるのと同様に、描画の意味もまた多義的であろう。具体例を挙げるならば、再検査信頼性を強く信じる研究では、個人の数枚のバウム表現はそれほど変わらないと考え、それは技法の特徴であるとする。しかし、バウム表現が変わらないことは、描き手の内的安定性とも自己表現の固さとも理解できる。一方、数枚のバウム表現が大きく異なっても、一概に技法がもつ不安定さとは理解できず、描き手がさまざまな様式で自己表現できること、描き手に表現の一貫性がないこと、描き手は内的不安定性をもつこと、とも理解できる。このように、表現は絶えず多義的な理解が可能であるため、見守り手としての心理臨床家は描画の理解において論理的矛盾を抱えなくてはならなくなる。この問題を科学的な研究から打破することは容易ではない。

古川（2010）は描画法における作品の変化というテーマに対して、心理臨床学的に正面から論じている。彼は、1枚の描画作品から解釈することに問題を認めながらも、数枚の描画作品を比較しながら理解することにも問題がある、という。つまり、絶対的な理解にも相対的な理解にも問題があると指摘しているのである。そして、描画プロセスを含め、描画そのものから現われてくる意味を大切に、「複数枚の描画の表現そのものがどう変化したか」という視点だけではなく、表現論理がどのように変化したかという点も検討していくことが可能となる（傍点は古川による）」とも述べている。古川のいう「表現論理」がどのようなものかは論考内で明確に述べられていないのだが、筆者はそれを、描画行為や描画作品が顕現化するまでの描き手の内的プロセスの構造、と理解している。筆者らの考えは、古川が描画理解の単純化に警鐘を發

している点と軌を一にし、彼と同じく「表現論理」に注目することも重要であると考えている。そのような姿勢が、見守り手である心理臨床家に、描き手とバウムへのコミットメントと、それにともなう一種の内的作業を要求するものだと考えられるからである。Koch（1957/2010）もそのような姿勢を重要視している。

しかしながら、その内的作業を行う上で道標となる「バウムの論理」は、これまで十分議論され研究されてきたとはいいがたい。つまり、われわれは、バウムという主題の構造を十分に明らかにできていないのではないだろうか。人間にとって樹木がどのようなものであり、樹木とバウムとはどのような差異があるのか、さらには、バウムの各部分はこころのどの層や側面と親和性があり、こころが（個人の在り方が）どのようなプロセスを経てバウムへと表象化するのか、という問題である。「バウムの論理」の重要性を強調する研究者もいるが（例えば、奥田、2005）、それを明らかにするような試みはこれまでほとんどなされていない。「バウムの論理（表現媒介がもつ論理）」を明らかにしていくことこそ、「表現論理」を理解していくことの基礎になる、と筆者らは考えている。

また、「バウムの論理」の解明は、臨床判断を行う心理臨床家に、一つの枠組みを提供するものになる。例えば、変化しやすいバウム形態部に対して、個人の固定的で根本的なパーソナリティ特徴を見出すことは難しく、むしろ、移ろいやすい形態部には、描き手の移ろいやすい心性が表現される、と理解する方が理にかなっている、などである。したがって、「バウムの論理」を明らかにする研究は、心理臨床家がバウム表現の内在的に、腑に落ちる形で論じる可能性を持つ。そのような丁寧な研究活動が、バウム理解における論理的

矛盾について、新しいステージで議論することを可能にさせる、と筆者らは考える。

IV おわりに

本研究によって筆者らは、個人のバウム表現は比較的安定しており、再検査信頼性は高い、と理解できる構造があることを示しつつも、同時に、見逃したくない変化も個人のバウム表現には認められることを指摘してきた。この変化を重視する立場からすれば、特定の臨床群に特徴的な指標を抽出する研究や、ある特定の心理学的特性と関連する指標を明らかにする研究は、そもそも方法論的に問題を有している、と指摘することになるかもしれない。筆者らは、決してそのような研究を否定するつもりはない。しかし、得られた知見をあまりに短絡的に理解しては、バウムが心理臨床に本当の意味で活かされることは難しいだろう、ということを強調したいのである。

文献

- 1) 青木健次 (1976). 描画法の再検査信頼性——バウム・テストを使って. 心理測定ジャーナル, **12**(8), 11-16.
- 2) 青木健次 (1980). 投影描画法の基礎的研究 (第1報) ——再検査信頼性. 心理学研究, **51**(1), 9-17.
- 3) 古川裕之 (2010). 描画作品の変化の意味について——表現心理学からの検討. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **56**, 223-235.
- 4) Koch, K (1957). 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 訳 (2010). バウムテスト [第

3版] ——心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房.

- 5) 国吉政一・林勝造・一谷彊・津田浩一・斎藤通明 (1980). バウム・テスト整理表. 日本文化科学社.
- 6) 名倉啓太郎・大塚君子・福田美智子・沢井晴美・細見房子 (1968). 児童における樹木画の発達と性格検査としての信頼性と妥当性について. 大阪樟蔭女子大学 児童学研究, **4**, 59-76.
- 7) 中島ナオミ (2011). バウムテストの発達指標に関する研究. 甲子園大学博士論文.
- 8) 奥田亮 (2005). 本研究のねらい. In: 山中康裕・皆藤章・角野善宏 編, バウムの心理臨床. 創元社, pp. 144-151.
- 9) 佐渡忠洋 (2011). バウムテスト研究の可能性. In: 岸本寛史 編, 臨床バウム——治療的媒体としてのバウムテスト. 誠信書房, pp. 28-43.
- 10) 佐渡忠洋・坂本佳織・岸本寛史 (2010) 実施法がバウムテストに与える影響——同一の描き手に行った個別法と集団法の比較から. 日本心理臨床学会第29回大会発表論文集, P. 256.
- 11) 坂本佳織・佐渡忠洋・岸本寛史 (2012). バウムテスト研究におけるスポットライト分析. 心理臨床学研究, **30**(1), 41-50.
- 12) 仙田善孝 (1980a). バウム・テストの信頼性——幼児を対象として. 心理測定ジャーナル, **16**, 14-20.
- 13) 仙田善孝 (1980b). バウム・テストの信頼性に関する研究——全体的印象について. 教育心理, **28**, 69-72.
- 14) 宿谷幸次郎・石田達男・丸山普・望月節子・小林保子・岩井寛 (1969). 状態像と絵画表現の間のパラドクシカルな意味について. 芸術療法, **1**, 41-46.